

集団から個へ 施設から地域へ



今年3月、平塚市内のお祭りで歌を披露する「とびっきりレインボーズ」(写真提供=進和学園)

措置制度から契約制
度へ変わった障害福祉
は、サービスを利用す
る人も、予算も伸びた。
その典型が平成元年に
400人だったが、現

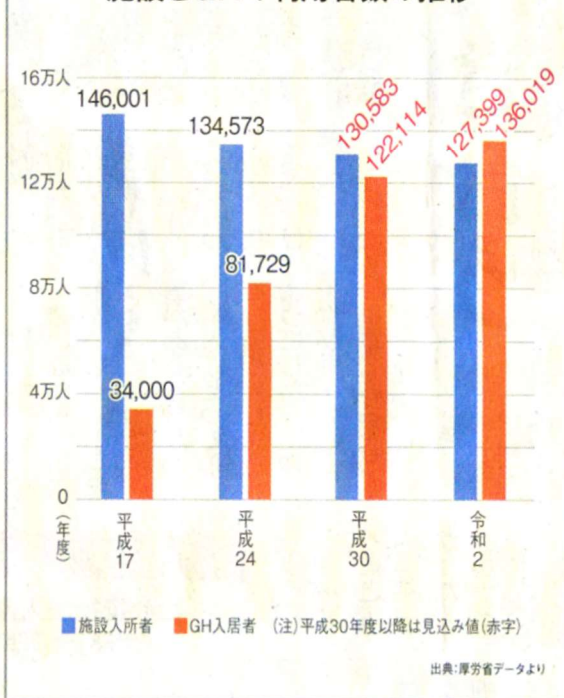
厚生省(当時)が制度
化したグループホーム
(GH)だ。初年度の
入居者は知的障害者約
400人だったが、現

在、身体障害、精神障
害の人を含め300倍
の12万人になった。
「集団処遇から個の支
援へ」「施設から地域
へ」。こうした合
言葉のもと、障害者の
暮らしは大きく変わっ
た。

「寝た子を起こした」
――平成15年度スタ
ートの支援費制度は権
利としてサービス利用
できる契約型の制度と
いう触れ込みだったが
が、すぐに財源不足が
露呈。冒頭のセリフを
吐いた厚生労働省幹部
は、予想以上にサービ
スを利用する人が増え
たと釈明した。

平成18年度の障害者
自立支援法施行後は、
国の障害福祉予算も右
肩上がり。12年間で2
・8倍になった。GH

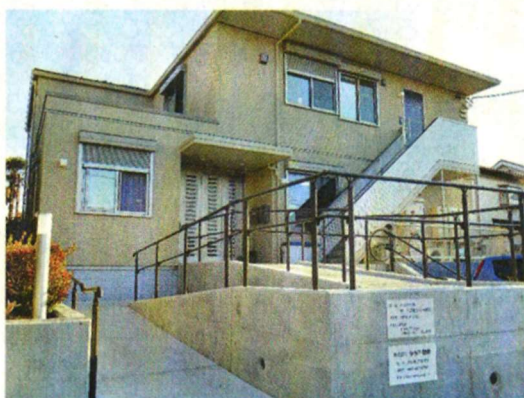
施設とGHの利用者数の推移



利用の伸びはそれにほ
ぼ比例する。
入所施設が三つあ
り、定員の合計が16
0人、GHが11カ所で
同67人の社会福祉法人
進和学園(神奈川県平
塚市)は、国の制度の
つつ暮らしの幅を広



平成元年開設の湘南セシリア。
正面に階段がある



平成30年開設のGHサンベスタ長後
にはスロープがある

障害福祉

げ、「見える化」を進めてきた。

例えば、法人内の音楽同好会「とびつきりレインボーズ」の結成は平成元年。メンバーは知的障害者ら約20人で、住まいは施設、GH、自宅とバラバラだ。

それでも夜間や休日には練習をすれば、お互いの暮らしが見える。

し、その時の事情に合う住まいを選べるのが良いのでは」と話す。キーワードは「暮らしを理解する」だ。

福祉施設は余暇活動も施設ごとになりがちだが、進和学園は違つ。施設ごとの利用者による自治会も、平成6年には連合会が発足。毎月、各自自治会の代表者

GHに12万人時代

地元の祭りなどに呼ばれて公演すれば、普段は出会わない人と「顔の見える関係」になる。「そんな居心地の良い暮らしをこれからも」。

が活動を報告しあう。呼び方も「利用者自治会」ではなく「本人自治会」に改めた。どんなサービスを利用しているかよりも「本人がどう暮らしたいか」を重視するからだ。

こう話す。従来は子どもが30、40代になったらと考える親が多かった。GHでの暮らしが、社会の中で「見える化」した結果、親の意識も変わったと石川さんはみる。

一方で、利用者の高齢化とも向き合う。同会が平成元年5月に開設した知的障害者の入所施設「湘南セシリア」(定員40人)。

者とは違い、階段を苦にせず外に出るといふ発想でした」と石川さんは説明する。それから30年。高齢になった今の入所者は、階段を避けるため、裏にある入り口から出入りするという。

そんな現実を踏まえ、平成30年5月に開設したGH「サンベスタ長後」には、車いすでも通れるようスロー

副理事長の出縄守英さんは「どこに住むのが良いか一概には言えない。いろいろな暮らし方があることを理解

「今の30代、40代の若い親御さんの間では、障害のある子どもが18歳になったらGHに、と考える人が増えてい

その正面玄関の前には階段がある。「当時、知的障害者は身体障害

プを設けた。湘南セシリアとは対照的だ。1階、2階とも定員は5人。1階は60、70代の人が暮らすバリアフリー仕様の作りだ。

「課題は人材育成です」と話す石川さん。この4月、法人内の研修制度を改めた。

GHの普及により暮らしが見えやすくなっただけに、課題も目につくようになった。

日本グループホーム学会(GHの入居者、職員、研究者など個人会員約900人)の室津滋樹事務局長は、昭和59年から横浜市内でGHを運営してきた立場から、「12万人という数字は手放しで喜べない。現在は定員30人の大規模なGHもあり、当初の理念とは違っている」とみる。

その上で「入居者の高齢化・重度化は大きな課題だ。GHを重裝備にするのではなく、外部のサービスを利用しやすい仕組みに見直すべきだ」と唱える。(福田敏克)



室津さん(左)が運営するグループホーム(横浜市)で35年間暮らす脳性まひの三谷浩之さん